



ジャン・ファビエ氏講演 (1989年6月15日国際文化会館にて)

大阪

あーかいぶず

二〇世紀の公文書問題

— ジャン・ファビエ氏講演より —

平成元年十一月

第五号

大阪府公文書館発行

公文書館法施行一周年を記念して、国立公文書館と全国歴史資料保存利用機関連絡協議会の主催で、去る六月十五日、東京の国際文化会館にて、国際公文書館会議（ICA）ジャン・ファビエ会長の講演会が開催された。フランスは、近代公文書館制度の発祥の地であり、創設して二〇〇年の輝かしい歴史と実績を有し、世界各国における公文書館活動のリーダーでもある。

今回の講演は、わが国公文書館のあり方について、示唆に富み、指針を示しているので、主観を混えず、主旨を要約して皆さんの参考に供したい。

なお、本館報の前号で、昨年のICAパリ大会におけるミッテラン大統領の演説内容を紹介しているが、今回の講演内容とあわせて通読してみると、フランスにおけるアーカイブズの機能と役割が浮き彫りになり、私達に公文書館の本質的な使命を訴えている。

次

目

| | |
|--------------|---|
| 二〇世紀の公文書問題 | 1 |
| 吉次郎博奕一件顛末記 | 3 |
| 府下講座案内 (1) | 3 |
| 昭和初期外国使節来阪記録 | 6 |
| 小説の中のアーカイブズ | 7 |
| 文書館あれこれ (1) | 7 |

1 フランスにおける公文書の管理は、およそ八〇〇年前から組織化されている。しかしフランス革命までは、政府や中央の行政組織の機関が、それぞれの公文書の所有権と管理権を持ち自主管理を行っていた。

国立公文書館は、一七九〇年九月（約二〇〇年前）、国民議会の決定により設立され、君主制下の政府や当時の主要研究機関等の資料を集めた。四年後には、法律で公文書の扱いに関する法的な基盤と公開等の原則を明確にした。次いで一七九七年の法律で、各県でも同様に公文書が集められた。各県の公文書館は、内務省との連携により実質上独立、国立公文書館は文部省（一九五八年から創設の文化省）の管轄にあった。

一九世紀になって、歴史研究が活発になり、古文書研究に関するシステム化の要請が高まって、一八九七年には、中央行政組織として公文書管理庁を設立し、国・県・市町村の公文書資料等を同時に管理することになった。

しかし、最近（一九八一年以降）、地方分権化政策が講じられることになり、統一・一

質したシステムの中で、法律により各地方に管理責任が移行され、国は法的・技術的な枠組みが適用されているかの監視・検査・忠告等を行っている。(県の代行もある。)

一〇〇の県・三万五〇〇〇の地方自治体における資料の受入れ・評価づけ・選別・分類など基本的な取扱いは、公文書管理庁が共通かつ系統的な一覧表を作成している。

2 一九七九年、公文書に関する法律で、閲覧に一貫性をもたせる対策が講じられた。資料の性格により、原則として大半は三〇年経過すれば閲覧可能。ただし国家の機密関係は六〇年間、個人の書類は生後一二〇年間、医療関係は生後一五〇年間、司法事件は審議閉了後一〇〇年間非公開である。

国民は広範囲の情報を知る権利がある。他方、自分の個人的な情報は知られたくないという矛盾したことを望んでいる。そこで、情報の取扱いを監視する目的で、首相の管轄のもとに、「情報とプライバシーの国民委員会」を設けている。公文書館では、コンピュータを導入し多数の一連の目録を入力しているが、記名式の目録やリストを作成する前に委員会の承認を受けることになっている。

国の政治・社会・経済の歴史について研究している大学関係者・学者等に対しては、研究目的外には使わないという確実な保証が得られれば期限以前に閲覧させている。

3 国立公文書館及び県・地方共同体の公文書館は、行政機関・教育機関・裁判所・政治家・閣僚・高級官僚等の文書資料、フランス銀行・エールフランス等産業・流通・金融関係の大企業手持ちの文書や中世の大荘園の古文書など、公共の公文書として個人所有の公文書・私文書の区別なく受け入れているが、個人所有のものについては、常に柔軟な態度で寄贈・寄託等の意向にそって対応している。

国と県の公文書館の資料の量は、棚の長さで二八〇〇km、毎年の収集資料は五〇km、そのうち一〇kmが国立公文書館に入ってくる。

4 利用者はこの三〇年間に二〇倍にも膨れ、その内訳は大学関係者ばかりでなく、歴史や家系図研究の愛好家や普通の市民などで、地域的・家庭的な関心からスタートしている。公文書館では、意図に沿って案内書や簡単な報告書を発行し、コンピュータで問い合わせのシステムを確立するとともに、学問の基礎を学ぶ研修センターを設立している。

他方、協会などのグループ作りを勧め、その全国大会に参加して意見の交換や指導に努めている。また、PRのため、様々な展示会やテレビ放映などで人々の注目を集めている。この一五年間に、新たに四〇の公文書館が建設されているのも無関係ではない。

5 公文書館のサービスを向上させたいが、担当者の数は相変わらず不十分である。

さらに数世紀後に評価されることになる必要不可欠だが漠然とした作業と、私達の存在価値や行動力を測定しうる今すぐの作業との重要度のバランスを心得なければならぬという困難な問題を抱えている。

紀元二〇〇〇年の幕開けを前にして、尊重してきた伝統を大切にすること、情報やコミュニケーションは記憶することであり、公文書館も記憶装置のようなものである。それらが普通に機能している時は何の注意も払わないが、機能しなくなった時が大問題だ。私達は記録として後世に残るように責務を果たしたい。

——ジャン・ファビエ氏の横顔——

一九三二年四月二日パリ生まれ。パリ文科大学・国立古文書学院卒業後、レンヌ文科大学・ルアン文科大学を経て、現在パリソルボンヌ大学中世経済史教授・フランス国立公文書管理庁長官・国際公文書館会議会長在任中。

古文書学士アーキビスト・文学博士等の資格、レジオン・ドヌール勲章等受賞、フランス学士院等会員、『文書館』(一九七〇年)ほか著作・論文多数。

(文責 大阪府公文書館長 岡田 大治)

吉次郎博奕一件顛末記

——川中家文書より——

江戸時代、博奕は一切禁止されていた。村の掟書である五人組帳前書にも、「博奕惣而賭之諸勝負」やそれに似た事をしている者、またその賭を行う場所を提供している者などがあれば早速訴える事、という内容の一条が記されている。これらの賭事とはどのようなものなのか、また捕らえられた者の生活や処分はどのようなものであったのか。当館へ寄贈されている川中家文書の中から、博奕に携わって捕らえられた吉次郎の一件文書が残されているので少し紹介してみたい。

ことの始まりは、弘化四年（一八四七）、河内国河内郡今米村（現東大阪市）の吉次郎（当年三四歳）が兎角おこないが悪く、たびたび御法度である賭事をしているようだという噂がひろまり、十二月七日夜、吉次郎は取り調べのため召し捕らえとなる。

翌八日朝、村役同伴にて、当時の今米村代官都築金三郎の役所のある大津へ向け出発、そこで取調べがおこなわれたが、吉次郎はなかなかすべてをすぐには白状しなかった。

十五日、吉次郎の罪状を詫び、入牢放免を願い出る文書が村方より大津役所へ出されたが、自白が不十分との判断からか、詫状は差

金山 正子

し戻しとなり、沙汰も決まらないまま、十七日に村役は帰村した。そして十二月中には吉次郎も番人付で村預けとなり帰村する。

その後、村役人による取調べが続けられ、

吉次郎 一件文書



同月中に吉次郎の自白に基づく取調書が、本人他四名より今米村代官都築金三郎手代鈴木正助へ出されている。この取調書から吉次郎の博奕罪状を追ってみたのが次頁の表である。松原村を拠点に、十人程の互いに名前も知らない者同士が寄り集まり、五〇文前後を賭けて勝負していた。これより先の享和三年（一八〇三）に、幕府が、五〇文以下の賭金の博奕を「軽キ博奕」と区別していたことからすると、五〇文というのが厳罰を免れるぎりぎりの枠だったのだろう。

吉次郎が賭事をしていた松原村界隈は、彼の住んでいた今米村から恩智川沿いに下った所で、村の中央を東西に暗越え奈良街道（大坂玉造二軒茶屋を起点とし、大坂と奈良を結ぶ最短の道である。）が通り、その街道沿い

Ⅱ 府下講座案内 (1) Ⅱ

大東市立歴史民俗資料館

古文書講座

大東市立歴史民俗資料館は今年で開設三年目をむかえ、昨年度より古文書教室（二〇名前後）を開催しています。昨年は、襖の下貼りに使われていた古文書を一枚ずつはがして裏打ちしたものを使って解読講座を行い、日記の断片などからも当時の生活にふれることができ好評でした。

今年度は、寄贈文書の中より「伊勢まいり（参宮記）」（弘化二年、大阪市加賀屋文書）をテキストに、川村和史氏（大阪府立四條畷高校教諭）に講師をお願いして講座を行っています。古文書解読はもちろん、地図を広げて伊勢まいりの道中を辿ったり、文中に出てくる当時の日用品の実物を見たり、古文書を通して様々な時代背景を探索しています。興味のある方は、左記へお問い合わせ下さい。市域外の方でも受け付けています。

日程／年間一〇回（月一回、土曜日午後）
連絡先／大東市立歴史民俗資料館（担当太田）

大阪府大東市新町一三三〇
☎〇七二〇（七三）三五二一

| 年 月 日 | 賭 博 場 所 | 人 数 | 賭 け 金 | 種 類 |
|----------------|-----------|--------|--------------------------|-----|
| 午 (弘化3年) 4.20 | 河州松原村小松屋 | 5-6 人程 | 100-200 文 | 廻り筒 |
| 4. | 河州松原村加賀屋 | 10人程 | 40-50 文 | 廻り筒 |
| 4. | 河州松原村扇屋 | | | 廻り筒 |
| 未 (弘化4年) 8.14頃 | 河州松原村川崎屋 | | 40-50 文 | 廻り筒 |
| 10. 1 | 河州松原村川崎屋 | 10人程 | | 廻り筒 |
| 10.20 | 河州松原村字二軒屋 | 10人程 | 50-60 文 | 廻り筒 |
| 11. 8 | 河州植付村安兵衛宅 | | 40-50 文、衣類質入 1貫500文打負 | 廻り筒 |

吉次郎博奕調べ (弘化3年=1846年)

に松原宿が置かれ、江戸期を通して宿場として繁栄したところである。弘化四年より一四〇余年前の宝永元年(一七〇四)には既に一六軒の旅籠があり、『枚岡市史』四)、その中には吉次郎が賭をした小松屋・扇屋・川崎屋の名前も見られる。吉次郎は親の善次郎方に同家して、農業の合間に桶屋をしたり、出稼ぎに出たりという生活をしてきた。小遣い銭を賭けての賽賭博(さいどくばく)やかるたが、数少ない気晴らしの一つだったのだろう。しかし、賭事はついエスカレートしてしまうようで、吉次郎は召し捕らえられる一カ月前の十一月八日には、輪竹を買いに額田村へ行った節、四、五人が打寄って四、五〇文宛の丁半賭博をしているのをふと見てそれに加わり、竹買銭はおろか衣類までも質入れたあげく、結局一貫五〇〇文も打ち負けてしまったのである。

年明けて弘化五年一月十日、大津役所より吉次郎と庄屋宛に呼出し状が来ており、取調べは続いたようである。そして再応吟味(さいおうぎんみ)の結果、この一件の沙汰が取り決められたのは、改元間もない嘉永元年(一八四八)三月二十三日のことで、吉次郎は中追放処分となる。追放処分というのは、江戸時代の主要な刑罰である。罪人の立入禁止場所を示す御構場所の範囲によって重・中・軽追放などが決められていたが、延享二年(一七四五)に、町人百姓の追放は一律に江戸十里四方と本人居住・犯罪の国を御構場所とするにとどめられることとなった。吉次郎の「御構場所書付」には次のように記されている。

「中追放 御構場所

江戸拾里四方 日本橋より四方江五里宛

河内国

右之場所徘徊すへからざるもの也

弘化五年三月廿三日

この河内国追放処分によって、吉次郎は生活の根拠地を失ってしまった。しかし、当人の処分は決まったものの、親類縁者には諸々の負担がかかってくるものである。嘉永元年十二月、吉次郎入牢中の諸人用として銀一九二匁六分を、吉次郎親・親類連名にて村役人衆中より借用している。そして、このうち八三匁五厘を文久三年(一八六三)十二月に返済し、残銀一〇九匁五分五厘を新たに証文をおこして借用している。その時の証文が左頁

に載せた写真のもので、裏書には、慶応元年(一八六五)十一月二十日に金二両(金一両は約銀六〇匁)を返済して事済みとなった旨が記されており、署名・押印部分が切り取られている。吉次郎処分決定の嘉永元年より一七年後のことである。

江戸時代の大衆賭博の種類

賽賭博・かるた賭博は江戸時代の二大賭博であった。吉次郎等がしていた賭博の種類を簡単に紹介してみよう。

丁半 二個のサイを用い、目の合計で丁

(偶数) か半(奇数)かを勝負する。

丁と張って半が出れば賭金を取られる。

廻り筒 賭客が代わる代わるにサイの入

っている壺箆(さる)を振る方法で、右廻りの

順に振り、左廻りは嫌った。

よみかるた 手持ちの札を順に一、二、

三と場に置いていき、札がなくなれば

上がり。その時の札の数が五以上と以

下で賭金の遣り取りが異なる。

めくりかるた 手持ち札の一枚に合わせ

て場の札一枚を取り、自分の点数とし、

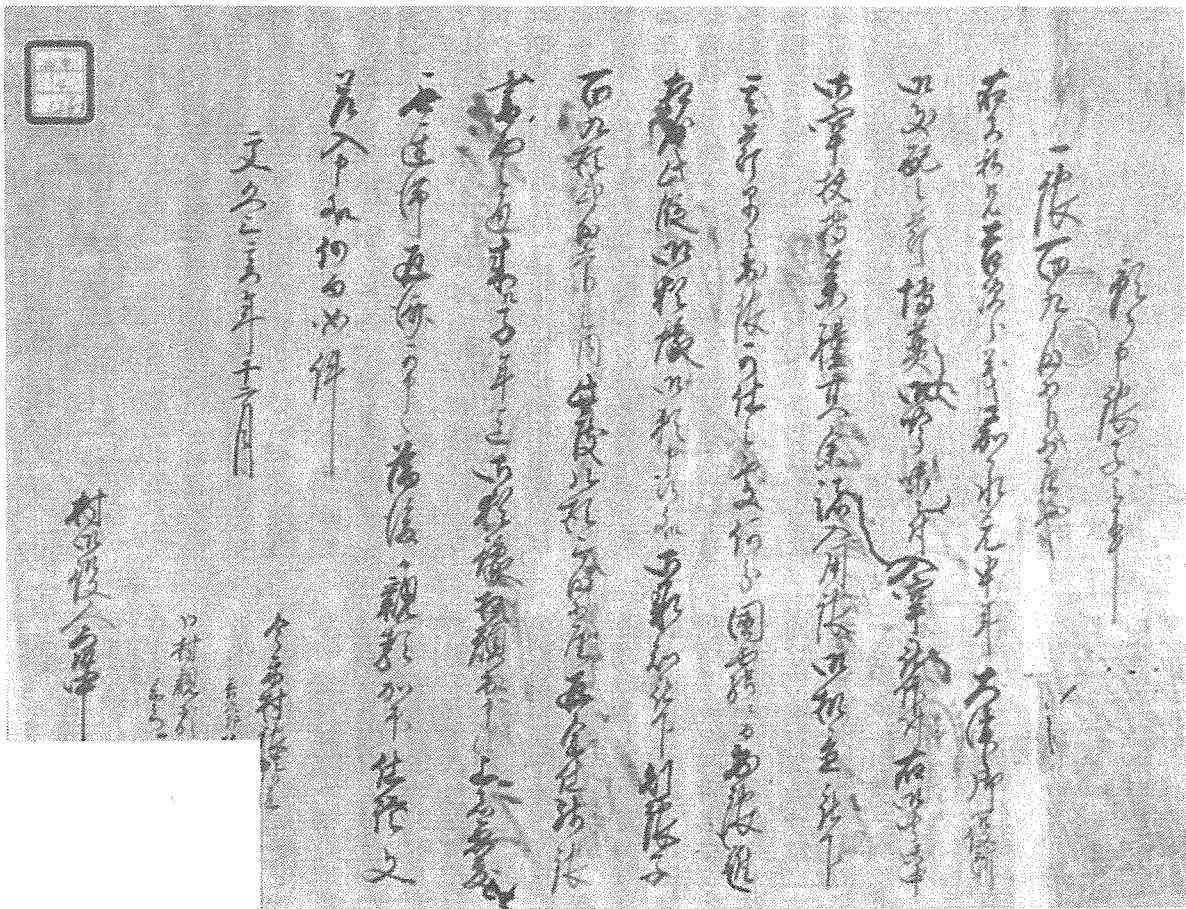
傍に裏向きに積んだ札を一枚ずつめく

り場に置く。取った札の役や点数の多

寡によって賭金の遣り取りをする。

ほか「かっぱ」という賭事が出てくるが、

どのようなものはわからなかった。



吉次郎入牢諸入用借用証文

預り申銀子之事

一銀百九匁五卜五厘也

右者私兄吉次郎義、嘉永元申年大津御役所

御支配之節、博奕御吟味ニ付入牢被仰付、右御吟味中

御牢扶持藥礼其余諸入用銀御扣置被下

其節早々出銀可仕之処、何分困窮ニ而出銀難

相成、此段御猶予御頼申候処御承知被下、則銀子

百九拾式匁六卜之内、此度八拾三匁五厘返金仕、残銀

書面之通来ル子年迄御猶予相願出申候上者、急度

無遲滞返済可申候、為後日親類加印仕証文

差入申処仍而如件

文久三亥年十二月

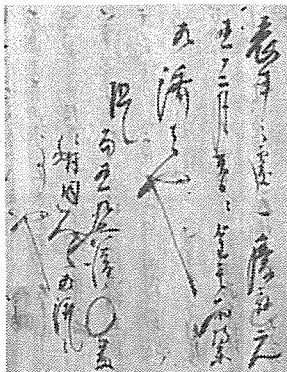
今米村銀預り主

善次郎

同 村 親 類

甚左衛門

村御役人衆中



(裏 書)

(裏書)

「表書之処へ慶応元

丑十二月廿日ニ金老両持参
相済者也

但し当丑九兵衛年番

ニ付同人へ相渡し候

もの也

昭和初期外国使節来阪記録

貴賓来往一件より

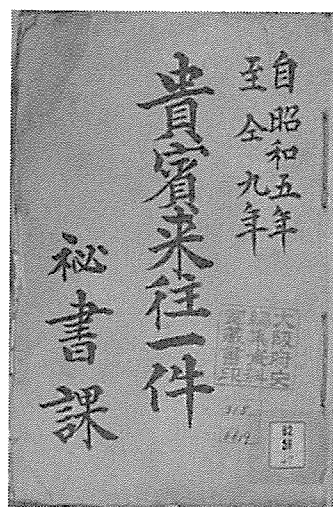
金山 正子

昭和初期の貴賓来阪の記録をたどれるものとして、当館には大正十五年から昭和十四年に至る六冊の文書綴が保存されている。国内外の要人等が来阪した際の記録や公文書が綴られたものであるが、その中から外国からの貴賓来阪の記録を二件紹介してみたい。

□独逸練習艦「エムデン」号の大阪寄港

昭和六年五月（この年九月に満州事変がはじまる）、独逸練習艦「エムデン」が士官候補生六六名を含む総乗員五二九名を乗せ、約一年間の周航の途中日本を訪れた。

長崎・大阪・宮島・敦賀・函館・横浜へ寄港の予定で、大阪へは五月一六日より六日間の滞在であった。独逸練習艦の訪日は、大正十五年の軍艦「ハンブルグ」の横浜来航をは



貴賓来往一件

じめとして大戦後第四回目のもので、当初和歌山へ寄港の予定であったのが、エムデンよりの希望で大阪に変更された。先に海軍省より、日独親交上寄港地においては特に鄭重に待遇する様にとの依頼があり、大阪府でも横浜での事例を参考に歓迎の対策を練ったようである。十八日には、府市共催で中央公会堂にて歓迎会を催し、市内見物・浪速踊見物をはじめ、天王寺音楽堂にて日独交歓音楽会・警察官武道試合参観、さらに二十日には三〇分間のエムデン音楽隊ラジオ放送など多様に組み込まれている。これに対し、最終日には関係者各位感謝招待会を軍艦にて行う「アットホーム」が開かれ、翌日エムデンは宮島へ向け出艦していった。

また、昭和八年六月にも同じく独逸練習艦「ケルン」が神戸港へ寄港し、同様の接待の記録が残されている。

□ヘレン・ケラー女史来阪

昭和十二年四月、約二カ月半の主要都市巡遊の予定で、ヘレン・ケラー女史がトムソン秘書と共に来日した。

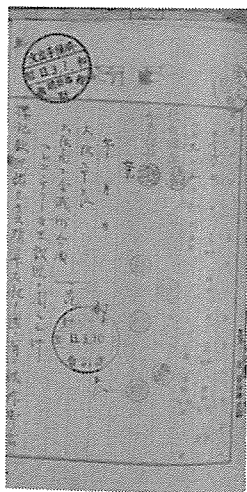
女史の来日は、我国の盲聾啞教育・保護事

業等を啓発し、「太平洋無条約第一年」（昭和十一年十二月ワシントン海軍軍縮条約失効）に当たり「文化を通じて日米親善の一助とも成るべく」、各種接待に特別の便宜をはかるようにとの旨が、来日に先だって社会局より道府県・学校等に通牒されている。

四月十九日女史来阪、翌二十日には大阪府・大阪市・大阪商工会議所の共催で公式歓迎晩餐会が新大阪ホテルにて開催され、女史には記念品として小鼓と裂地ハンドバッグが贈呈された。歓迎会の後、大阪朝日新聞の主催で講演会が開催されたのをはじめとして、女史在阪中には、婦人大講演会・一般市民大講演会・盲人大会・小学生大会・教職員大会・盲聾啞学生大会などの各種会合が催された。

なお、ここに紹介したほかにも、昭和六年米国飛行家リンドバーク夫妻・同九年救世軍参謀長ヘンリーマップ中将・同十四年伊国軍艦視察遊覧など、件数にして七五七件の来阪記録が綴られている。

（かなやま まさこ 大阪府公文書館）



ヘレン・ケラー一件

小説の中のアーカイブズ

大西 愛

アーカイブズという言葉は訳語もまだ定まらないし、一般には知られていなくて、小説や普通の図書に登場してくることは少ない。それがたまたま今年の夏は、小説の中でアーカイブズに出あったり、そういう情報に出くわしたりしたので、それを紹介してみよう。私が読んだのは、小松左京著『さよならジュピター』（講談社）というSF小説である。時代は二十世紀、人類は地球上には住みきれず月・火星はもちろん多くの人工衛星上にもあふれ、そのため太陽から遠い星のためのエネルギー源として、木星を太陽化しようとする話である。この中に「資料保存所衛星」というのがでてくる。発展してきた地球上や宇宙上の歴史的資料を専用の人工衛星を打ち上げてその中に保存している。重要方針をたてるときはこの衛星の古い記録を参照するのである。

また、吉永小百合主演のテレビ放送「ミッコ、二つの世紀末」にも文書館のことがでており、これが本になっていると聞いた。探すとテレビ化のときに作られたシナリオと同時進行で調査をすすめて活字作品とした松本清張著『暗い血の旋舞』（朝日新聞）とがあった。これは青山ミッコという明治に東京で生まれた日本女性がボヘミア地方の地主へ嫁いだ時の

調査記録である。すでに書かれた伝記を東京都公文書館にある結婚届や渡欧時つき従った乳母二人の渡航記録などの史料で裏付けながら話が進められている。チェコ古文書館や国内のクラトピー地方文書館にはミッコの遺書・手紙、それにミッコが暮らしたロンスペルグ城内にあった彼女や家族の写真や本・書類などすべてをチェコの財産として保存しているという。この二書は過去の調査の形式をとっており多くの文書館やそれを管理する委員会や文書館員が登場してくる。

さらにアメリカのリックボイヤー著『幻のペニー・フェリー』（講談社）という探偵小説の中でてくるアーカイブズを国立史料館の安澤秀一氏が『我孫子市史研究』に紹介されている。ある配達人が重要なものを運んでいて殺されると、仲間が「あいつはアーカイブズ（訳は公文書とある）を運んでいったんだ」という。これはある事件の証拠書類なのだが、そういうものをアーカイブズと表現しているところに安澤氏は注目しており、外国の小説ではごく身近な親しさでアーカイブズが使われていることがよくわかる。

このように気軽にこういう方面からアーカイブズを読んでみてもおもしろいと思う。そしていつの日か、ふつうの会話の中に文書館や史料が語られる「先進国」になってほしいと願っている。

文書館あれこれ (1)

東京都公文書館

東京都港区海岸一―三―一七

JR浜松町駅から徒歩7分、港に近いところにある鉄筋地下一階地上六階、延べ三二〇〇㎡の建物が公文書館である。昭和四十三年に設立され、二一年間にわたって公文書等を収集・保存し、公開利用に供してきた。

ここから電車を利用すると三〇分ほどで行ける東京都庁（千代田区丸の内）で作成・収受する文書（起案・供覧文書）は年間約六十万件である。そのうちの「長期保存文書」（永年保存されるもの）約二万八〇〇〇件（約三三〇〇冊）が毎年公文書館へ持ち込まれる。それらを整理して修復などを施し、書庫に課別に配架する。公務利用のため都や区・

東京都公文書館（写真提供東京都公文書館）



市町村職員や一般利用者より請求があれば短時間に取り出せるように、目録も整備されている。

大阪府公文書館と大きく違うところは、永年文書を中心に保存すること（大阪府は永年文書は本庁で保存されている）と完結後三年で公文書館へ移されることである。したがって文書の利用は、(1)都庁職員が情報公開制度により都民の請求した文書の有無や内容を見るために、(2)都や区・市町村職員が行政上過去の事例を参照するために、(3)一般の人が歴史的資料を見るために、来館したり、電話でレファレンスするので利用件数が大変多い。

保存文書には、明治期二万三〇〇冊、大正期六四〇〇冊、昭和期（十八年以前）一万四九〇〇冊と大量の戦前文書が含まれており、これらの文書は一般の利用に供されている。これは関東大震災や戦災をくぐりぬけ、また人為的に破壊されようとしたこともあるのを職員の努力によってなんとか守ってこられたものである。「制度だけが文書を残すのではなく、人が残すのである。」と館員は心がけている。

（おおにし あい 大阪府公文書館）

「文書館あれこれ」では全国の文書館や公文書館などの紹介を、できれば当館との違いに着目して続けていく予定です。

『大阪あーかいぶず特集号』No.2の

原稿を募集します

1 今回は「特集・文書の保存にたずさわる人々」をテーマとしますので、これに添った内容の研究や意見

2 アーカイブズとは、アーキビストとは、また

3 大阪府の行政や府域の歴史的内容で、資料にもとづいた新しい研究の結果や紹介

4 本館所蔵資料についての研究や館蔵資料の紹介

以上を、四〇〇字詰原稿用紙五〇枚まで。

詳細はお問い合わせください。

〓お知らせ〓

▼国立公文書館所蔵の太政類典および公文録のマイクロが全巻揃いました。利用御希望の方は、事前に当館へ御連絡ください。

編集後記

▼一冊の本をひらいて自分の時間を楽しむように、一綴の文書に目をとおしてみる。ちょっとしたことばのひとつから興味がひろがり、意外な発見があるかもしれません。

▼史料は人間の生活という基盤があってこそつくられてきたものですから、その人なりの見方のできる変幻自在なものではないでしょうか。（M・K）



利用案内

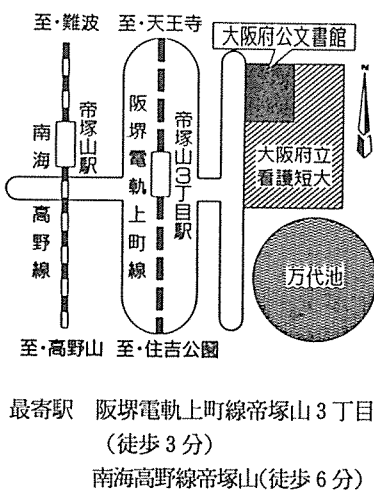
■閲覧時間

・月曜日～金曜日 午前9時30分～午後5時
・土曜日 午前9時30分～午後0時30分

■休館日

・日曜日、祝日及びその振替休日
・年末年始（12月28日～1月4日）

・毎月末日（その日が日曜日の場合はその前日）



大阪あーかいぶず 第五号

平成元年十一月十一日発行
編集発行 大阪府公文書館
大阪府住吉区帝塚山東二丁目一四四
電話 〇六一六七五―五五五一
印刷 大阪府官印刷所